

アイロニー：伝統的なアプローチと最近のアプローチ(2)

Traditional and Recent Approaches to Irony(2)

村越行雄

要 旨

前号では、「アイロニー：伝統的なアプローチと最近のアプローチ」の前半部分を発表したか、その続きの後半部分を今回発表することにする。全体の検討順序は、すでに前号で示したが、再び示すこととする。

「1. はじめに」に続く「2. 伝統的なアプローチ」では、「2-1. 最近の文献に見られるアイロニー」において、代表的な語用論の概説書、入門書などに見られるアイロニーの定義を調べ、「2-2. アイロニーの古典的定義」において、古代ギリシャ・ローマ時代に見られる古典的定義の多面性を調べ、「2-3. アイロニーの伝統的定義」において、「2-3-1. GriceとSearleの定義」として、反対という概念による定義に関連して、よく引き合いに出されるGriceの定義とSearleの定義を調べ、「2-3-2. 反対という概念による定義への批判」として、字義どおりの意味などに関連して、二・三の問題を取り上げ、反対という概念による定義への批判を調べ、更に「3. 最近のアプローチ」では、「3-1. アイロニーの特徴」において、話し手の態度と目的などを調べ、「3-2. アイロニーの種類」において、非字義的アイロニーと字義的アイロニーへの分類法の意味について調べ、「3-3. 最近のアイロニーの定義」において、Sperber & Wilsonのエコーという概念による定義を調べ、「4. おわりに」で終えるという検討順序である。簡単に言えば、前半の「伝統的なアプローチ」で、アイロニーの古典的定義と伝統的定義を検討し、後半の「最近のアプローチ」で、話し手の態度と目的、アイロニーの分類、エコーという概念による定義を検討することになる。そして、今回は、後半部分である「3. 最近のアプローチ」と「4. おわりに」を発表することになる。

Key words : アイロニー (irony), レトリック (rhetoric), 反対 (opposition), 矛盾 (contradiction), 否定 (negation), エコー (echo), グライス (H. Paul Grice), サール (John R. Searle), スペルベルとウィルソン (Dan Sperber and Deirdre Wilson)

3. 最近のアプローチ

アイロニーについて考える時、最初に浮かぶのが、反対という概念による定義である。それほど強く、アイロニーと反対という概念が結び付いているのである。古代ギリシャ・ローマ時代まで遡ることができ、その長い歴史を通して現在に至るまで、根強く維持されてきている。そのようなアイロニーと反対という概念の強い結び付きが現在でも維持されている一方で、それとは対立するようなアイロニーの定義が現われ、かなりの支持を得てきている。そこで、最近のアプローチの中で、注目すべき点を幾つか取り上げて、検討することにする。なお、反対という概念については、すでに検討してきたので、ここでは問題を単純にする意味で、広義の反対という概念を前提にして話を進めていくことにする。

3-1. アイロニーの特徴

Gibbs (1993, p. 262) が irony is a risky business (アイロニーは、危険な仕事だ) というように、アイロニー発話の理解は、決して簡単なものではない。相手が発話をアイロニーであると気付いてくれるかどうかは確信できないし、もしかしたら、字義どおりに受け取って、誤解、さらには悲劇を生み出す結果になってしまうかもしれず、また相手がアイロニー発話であると気付いてくれても、その背後に隠れている真の意味を見つけ出してくれるかどうかは確信できない。そこにアイロニーの危険性がある。では、アイロニー発話の理解がいかに難しいかを少し見ることにしてしよう。

Winner & Gardner (1993, pp. 436-438) による子供のアイロニー理解度に関する記述は、興味深いものがある(実際は、A. Domorest, E. Meyer, E. Phelps, H. Gardner, & E. Winner, (1984) "Words speak louder than actions : Understanding deliberately false remarks", *Child Development*, 55, 1527-1534に基づくものである)。なお、彼らは、アイロニー、間違い (mistake, error), そして嘘 (lie) の三つが混乱されるのは、全てが反対の関係に基づくからであるとしているように、アイロニーを反対という概念で捉えている。まず、次の物語を子供たちに読んであげる。それは、大変不揃いなヘアカットをされたジェイという少年が床屋から出ると、友人のマイクに偶然出会い、マイクがジェイにあざけるような抑揚で "your haircut looks terrific" (「君のヘアカットは、素敵に見えるよ」) というものである。それから、①ヘアカットが本当にひどかったこと、②マイクはヘアカットがひどいと信じていたこと、③マイクはジェイにヘアカットがひどいと思わせることを望んだこと、以上の三点のそれぞれについて子供たちが知っていたかどうかを決定し、その組み合わせによって、間違い、軽い嘘 (white lie), そしてアイロニーの相違を判断する。

(1) 子供たちは、ヘアカットがひどかったと思ったが、マイクが間違えてヘアカットを良

いと信じていたと思った。その場合は、子供たちはマイクの発話を間違いとして解釈したことを示す。(①, ~②) (~は、否定を意味する)

(2) 子供たちは、ヘアーカットがひどかったと思ったし、マイクはヘアーカットがひどいことを知っていたと思ったが、マイクはジェイにヘアーカットが良いと思わせることを望んだと思った。その場合は、子供たちはマイクの発話を軽い嘘として受け取ったことを示す。(①+②, ~③)

(3) 子供たちは、ヘアーカットがひどかったと思ったし、マイクはヘアーカットがひどいことを知っていたと思ったし、マイクはジェイにヘアーカットがひどいと思わせることを望んでいたと思った。その場合は、子供たちはマイクの発話をアイロニーとして受け取ったと考えられる。(①+②+③)

そして、次の結論に達する。8・9歳以下の子供たちは、その発話をアイロニーとして受け取ることができなかった。その内訳は、最も少ないケースとしては、発話を字義どおりに真であると受け取り、ヘアーカットが本当に良かったと信じてしまった子供たちがおり（それは、6歳の子供たちによるものであった）、次に多いケースが(1)で、最も多いケースが(2)である。つまり、8・9歳以下の子供たちは、アイロニーを正しくアイロニーと受け取ることができず、間違いあるいは軽い嘘と受け取ってしまったことになる。その発話を間違いと受け取った子供たちは、その虚偽を聞き取ることはできたが、その虚偽の意図性は理解できなかったことになり、軽い嘘と受け取った子供たちは、その虚偽と虚偽の意図性を聞き取ることはできたが、話し手の伝達意図は理解できなかったことになり、そして、軽い嘘と受け取るケースが最も多かったということは、話し手の伝達意図（話し手は聞き手に言われたことを信じるように望んではいないということ）を理解することが大きな壁になっていることを意味する。従って、間違いと受け取ることを避けるためには、話し手の実際の信念（話し手が何を本当に信じているのか）を推論する能力が必要であり、嘘と受け取ることを避けるためには、聞き手の信念についての話し手の意図（話し手は聞き手に何を信じさせようと望んでいるのか）を推論する能力が必要である。つまり、アイロニー理解には、他の人の心を推論する能力が非常に強く求められているので、例えば、隠喩と比較すれば、より理解しづらいものになっている。

以上のWinner & Gardnerの意見について、興味を引く点は、子供たちを調べることで、字義どおりの発話の理解よりも、また隠喩的発話の理解よりも、アイロニー発話の理解の方が難しいことが実証されたことである。しかも、字義どおりの解釈→間違いとしての解釈→嘘としての解釈→アイロニーとしての解釈という段階的な過程で、アイロニー発話の理解度・困難度が明らかにされたことである。6歳の子供は、様々な情報を全て無視して、字義どおりの発話であれ、アイロニー発話であれ、何でも字義どおりに解釈して、そのまま信じてしまう傾向があり、8・9歳以下の子供は、入手可能な情報がある程度は利用するので、字義どおりに解釈することはな

いが、間違いであると解釈したり、更に多いのが、嘘であると解釈してしまうことになり、8・9歳以上の子供になって初めて、入手可能な情報を十分利用しながら、アイロニーであると解釈できるようになる。そこでは、入手可能な情報を見出すことができるかどうか、見出しても、どの程度利用できるかどうか、更にその情報に基づいて、話し手の信念や意図をどの程度正確に理解できるかどうか、言い換えれば、広義のコンテキスト、話し手と発話の関わり方などが重要な要因になってくる。そして、大人一般の場合にも、発話の解釈の相違は生じてくる。コンテキストによって、入手可能な情報の範囲が量的にも、質的にも異なり、それによって話し手が何を信じて、何を意図して発話するかの理解度が異なり、それによって話し手と発話の関わり方の鮮明度が異なり、結局ある発話を字義どおりに受け取ったり、勘違いと受け取ったり、嘘と受け取ったり、アイロニーと受け取ったりするであろう。そこに、危険性が生まれると言えよう。その上、その他のことによっても、大きく異なることになる。例えば、個人によって、また地域によって、アイロニーの理解度が異なってくることもあろう。Barbe (1995, pp. 3-5) によると、アイロニーを言ったり、理解したり、評価したりする能力に関して、英語圏とドイツ語圏の文化圏の相違、英語圏の中でも、イギリスとアメリカの相違、アメリカの中でも、北部と南部の相違、さらには都会と田舎の相違などに、偏見が生まれてしまい、アイロニーに関する能力を有することが、知能、洗練さ、機知などを有することになり、そうでなければ、逆になってしまう。もしそうであるとすれば、単にアイロニーの理解度が異なってくるだけでなく、偏見が生まれる結果にもなってしまう。そして、危険性は更に上昇することになる。アイロニーを評価できる人、国民、民族、文化のみが、都会的で、知的に洗練された、機知に富んだものとなり、それ以外のものは、それから外されることになるであろう。

以上のことで、アイロニー発話の理解にとって重要なことは、話し手の信念と意図、そして話し手と発話の関わり方についての理解であることが明らかになったと思う。言い換えれば、それは、話し手の態度 (attitude) を理解することである。実際に言ったことに対して話し手本人がどのような態度を示しているのか (明示的か、それとも暗示的か) をはっきりと理解することが必要であり、ただ単に話し手が実際に言った言葉だけでなく、それに対する話し手の態度も理解しなければ、アイロニー発話の理解にはならないということである。そのような話し手の態度をアイロニーの特徴であるとする考え方は、多くの研究者が同意する点でもある。例えば、Winner & Gardner (1993, pp. 428-429) は、アイロニーの主要な機能として、隠喩の場合の記述することに対して、話し手についてあることを示すこと、つまりあることに対する話し手の態度を示すこととしており、同様にBarbe (1995, p. 87) も、隠喩が記述で、アイロニーが態度であると言い、Sperber & Wilson (1981, pp. 302-303; 1986, pp. 239-241; 1997, p. 287) も、態度であると言うように。

Irony is an attitude to an echoed content (アイロニーは、エコーされる内容に対する態度

である) (Sperber & Wilson, 1997, p. 287 : 別の論文では, speaker's attitude to the opinion echoed, or the thought echoed, an attitude of the speaker to his utterance, or the content of an utterance など, エコーされる内容以外にも, エコーされる意見, 発話, 発話の内容という具合に, 言い方は変わるが), irony is an attitude (アイロニーは, 態度である) (Barbe, 1995, p. 87) などのように, アイロニーの特徴が「態度」であることが端的に言われている。そして, 態度という概念は, Barbe (1995, pp. 62-64) に従えば, アイロニーの古典的定義 (Barbeによると, AristotleとCiceroに見られる) の中にすでに見られるもので, その意味で, 古代ギリシャ・ローマ時代の古典的定義との深い関わりを感じるどころである。それに, Sperber & Wilsonが伝統的理論とGriceの理論を批判する時, 態度という概念を考慮に入れなかったことを批判するのであるが, 批判されるGriceの方も, 注目されることは少ないが, 振り (pretense) という概念でアイロニーを特徴づけており (Grice, 1978, p. 125), それもすでにアイロニーを振りと捉えるPlatoの考えに見られるもので, 同様に, 古代ギリシャ・ローマ時代の古典的定義との関わりを感じるどころである。結局, 反対という概念による定義を軸にしながら, 批判する側も, 批判される側も, とともに古典的定義に関わりを持っており, 更に反対という概念による特徴づけそのものが古典的定義にすでに見られるものなのである。

では, 態度とは, どのような態度のことであろうか。話し手が自らの発話に対して示す態度は, 当然の事として, 様々な可能性があり, 肯定的なものから否定的なものまで, あらゆるものが考えられるはずである。しかし, ほとんどの場合, 研究者が使用する例は, 否定的な態度に関わるものである。そのような傾向は, 自然のように思われるであろう。アイロニー発話の場合は, 話し手は自ら言ったことを信じておらず, またそのように聞き手に思わせようとするような態度を示すのであり, 従って否定的な態度を示すと思われるからである。例えば, 態度という概念の重要性を強く主張するSperber & Wilson (1986, pp. 239-240) を見れば, 今述べたことがはっきりするであろう。

話し手がエコー (echo) される意見に対して示すことのできる態度には制限がなく, 同意の場合もあれば, 不同意の場合もあるとして, 次の例を挙げる。

(111) (a) *He* : It's a lovely day for a picnic.

[They go for a picnic and the sun shines.]

(b) *She* (happily) : It's a lovely day for a picnic, indeed.

(112) (a) *He* : It's a lovely day for a picnic.

[They go for a picnic and it rains.]

(b) *She* (sarcastically) : It's a lovely day for a picnic, indeed.

((111) (a) 彼 : ピクニックに出かけるにはいい日だね。

[二人はピクニックに出かけ, 太陽は輝く。]

(b)彼女(喜んで) : 本当にピクニックに出かけるにはいい日ね。

(112) (a)彼 : ピクニックに出かけるにはいい日だね。

[二人はピクニックに出かけ、雨が降る。]

(b)彼女(皮肉を込めて) : 本当にピクニックに出かけるにはいい日ね。

(111b) と (112b) は、ともに前文をエコーしている発話(エコー発話)であるが、(111b)の話し手は、エコーされる意見を是認しているが、(112b)の話し手は、エコーされる意見を軽蔑の気持ちで拒否しており、両者の態度の相違がはっきりしている。そして、(112b)の方がアイロニーのケースである。それから、The attitude expressed by an ironical utterance is invariably of the rejecting or disapproving kind. (アイロニー発話によって表される態度は、常に拒否や不賛成といった類のものである。) と言い、更に全てのアイロニー発話の解釈に共通する三つの要素として、a recognition of the utterance as echoic (発話がエコー的であるという認識)、an identification of the source of the opinion echoed (エコーされる意見の出所の同定)、a recognition that the speaker's attitude to the opinion echoed is one of rejection or disapproval (エコーされる意見に対する話し手の態度が、拒否と不賛成のいずれか一方であるという認識)を挙げている。

以上のように、話し手の態度には制限はないが、アイロニーに限定すれば、是認、賛成などの肯定的な態度ではなく、拒否、不賛成などの否定的な態度の方が考えられ、そのことは、全てのアイロニー発話に共通して言えることであるということになる。それに加えて、拒否や不賛成といった態度の範囲を特定化する必要はないとしている(怒り、いらだちなどがその範囲に入るかどうかという具体的内容の問題)。つまり、アイロニー的態度が否定的な態度であるとしても、その具体的な中身は問題にすべきではないということである。

それに対して、Dell Hymes (1987, p. 300) は、Sperber & Wilson (1981, p. 307) からの引用を利用して、態度の範囲を拡大する。In each case, the speaker's choice of words, his tone (doubtful, questioning, scornful, contemptuous, approving, and so on), and the immediate context, all play a part in indicating his own attitude to the proposition mentioned. (それぞれのケースにおいて、話し手の言葉の選択、話し手の声の調子(疑わしい、不審そうな、軽蔑的な、侮辱的な、賛成の、など)、そして直接のコンテキスト、それら全ては、言及される命題に対して自らの態度を示す時に役割を果たすものである。) というアイロニーに関するSperber & Wilsonからの引用の内、とくに話し手の声の調子の具体的内容の中で、唯一肯定的な approving (賛成の) に注目して、As barely suggested by 'approving'..., attitudes can range more broadly. They may include amused surprise, detachment, recognition, sorrow, pleasure at entertaining a notion. (「賛成の」によってわずかに示唆されるように、態度はより広い範囲に及ぶことができる。そこには楽しい驚き、超然、承認、悲

しみ、考えを心に抱くときの喜びが含まれる。)とHymesが言うのである。つまり、Sperber & Wilsonからの引用の中から示唆を得ながら、彼らとは異なり、範囲を拡大することになり、結局アイロニー的態度は、肯定的なものまでも含み、より広い範囲に及ぶことになるのである。

なお、Hymesが引用したのは、Sperber & Wilsonの“*Irony and the Use-Mention Distinction*” (1981)で、その中のわずかな示唆を明確化し、範囲を拡大するのであるが、その前に引用したのは、Sperber & Wilsonの*Relevance* (1986)で、そこでは「...態度は、常に拒否や不賛成といった類のものである」などのように、否定的な態度の側面が前面に押し出されている。何らかの変更があったように感じられよう。しかし、Sperber & Wilsonは、注(1986, pp. 263-264)で、1981年の論文で使用したmention(言及)をinterpretation(解釈)へと用語を修正した以外は、アイロニーの説明について、実質的な変更はなかったと言う(彼らの理論がthe echoic mention theory(エコー的言及理論)、the mention theory(言及理論)などと呼ばれているように、極めて重要な概念だけに、単なる用語上の修正で済ませられるのであろうか)。もし彼らの主張を受け入れるならば、アイロニー的態度を否定的な態度として捉える姿勢には変更はないが、それだけでは全て完全に処理しきれない部分も残していると言えるかもしれない。しかし、Hamamoto(1997, p. 258)のように(*Relevance* (1986)だけでなく、Wilson & Sperberの“*On verbal irony*” (*Lingua* 87, 1992, 53-76)も利用している)、Sperber & Wilsonの理論では、アイロニーが常に否定的な態度を伴うものとして捉えられているとする意見が多いことも事実で、その意味から言えば、アイロニー的態度を否定的な態度に限定していることになろうし、従ってHymesの言うわずかな示唆であったものが、のちに示唆が明確化されることなく、そのまま消えていってしまったことになろう。

アイロニー的態度については、その範囲を否定的なものだけに限定すべきか、それとも肯定的なものまでも含めるべきかのいずれにするかが問題になる。まず言えることは、アイロニー発話の大部分が、否定的な態度を伴うものとしてあり、そのことが研究者の使用する例に反映して、結果的に否定的態度に関わるものになってしまったということである。ここまでは問題はないと言える。問題は、話し手が自ら言ったことを信じており、またそのように聞き手に思わせようとするような態度を示すアイロニー発話の例があるかどうかである。もし存在すれば、肯定的な態度を伴うアイロニー発話が存在し、アイロニー的態度の範囲が拡大されることになる。例えば、Leech(1983, pp. 80-82)、Gibbs(1993, p. 264)などに従えば、またBarbe(1995, pp. 16-31)に従えば、存在することになる。Barbeによれば、アイロニーが非字義的アイロニー(non-literal irony)と字義的アイロニー(literal irony)に分類されるが、従来の主流をなしていた例が非字義的アイロニーに属するもので、数の上では少ないが、肯定的な態度を伴うアイロニー発話が字義的アイロニーに属するものになると言ってもいいであろう。あとで調べることにして、ここでは具体的には何も言わないことにするが、重要なことは、Barbeがアイロニーを分

類したことであり（否定的か、肯定的かの態度の分類には触れられていないが）、そのことによりアイロニー発話の中身がより明確になったことである。ただ残念なことは、Barbeがはっきりとアイロニーを分類したにもかかわらず、Irony so far emerged as a critical attitude used for politeness' sake.（今までのところ、アイロニーは丁寧さのために使用される批判的な態度であることが明らかになった。）（1995, p. 73）と言い、否定的な態度を伴うものとして捉えていたことである。その原因は、その一つとして、多分、アイロニー発話で話し手が示す態度と目的の混乱・混同によるものであらうと思われる。ともかく、字義的アイロニーの存在を認めれば、アイロニー的態度の範囲は、否定的なものに限定されるのではなく、肯定的なものまでも含むものとして、従来の解釈よりは拡大されることになる。

では、アイロニー発話の時に話し手によって示される目的とは、何であろうか。Aristotleのpraise-by-blame（非難による賞賛）とblame-by-praise（賞賛による非難）という区別の仕方を利用して、目的を見ることにする。なお、非難と賞賛という概念は、広義に捉えて、否定的な内容のもの、そして肯定的な内容のものとして話を進めていくことにする。アイロニー発話は、相手を賞賛することによって、非難したりするだけでなく、その逆に、相手を非難することによって、賞賛することもできる可能性を持っているはずである。しかし、研究者の使用する例は、大部分が、賞賛による非難を内容とするものである。多くの例を見ていけば、すぐにわかることである。その理由は、ごく単純に考えれば、人を非難することは容易ではなく、はっきりと直接非難するよりは、間接的に遠回しに非難する方が好まれるのに対して、人を賞賛する場合は、なにも遠回しに言わなくても、相手に直接言ってもかまわないであらうと人々が感じるからであらう。つまり、非難する場合は、まず賞賛するような内容のことを言って、間接的に非難するというアイロニー発話が好まれるが、賞賛する場合は、直接そのまま賞賛するような字義どおりの発話の方が適していると感じるからであらう。

Sperber & Wilson (1981, p. 312) は、次のような言い方をしている。How clever（なんて頭がいいんだろう）と言って、“How stupid”（「なんて馬鹿なんだろう」）を含意する方が、その逆よりは遥かに起こりうるということは、伝統的理論のように、意味の反転によって説明することはできないとしている。そして、行動の規範というものは、文化的に規定され、一般的に知られ、頻繁に引き合いに出されるので、エコーの対象として、いつでも利用できるが、批判的判断というものは、ある一定の個人あるいは機会に特定化されているので、エコーの対象として、たまにしか利用できないとしている。従って、失敗についてThat was a great success（それは大成功だった）とアイロニー的に言うのはいつでも可能で、それは、成功を望むのが普通だからであり、それに対して、成功についてThat was a failure（それは失敗だった）と言うには、エコーの対象になるべき過去の疑いあるいは恐怖が存在していなければならないとしている。彼らにとっては、アイロニーはいつでも必ずエコー的であるという定義を前提にしているため、エ

コーの対象となるべきものが絶対に必要で、もしなければ、アイロニーではなくなってしまう。そこで、失敗を成功としてアイロニー的に言うケース（上記の賞賛による非難の部分）は、エコーの対象となるべきものが行動規範であるため、いつでも可能であり、頻繁に見かけるものであるが、その逆に、成功を失敗としてアイロニー的に言うケース（上記の非難による賞賛の部分）は、エコーの対象となるべきものが、ある特定の個人あるいは機会に限定されるため、いつでも可能であるとは言えず、頻繁に見かけるものではないのであり、結局以上の理由で、前者のケースの方が、後者のケースと比べて、より多くなるという結論に到達するのである。エコーの対象の存在を前提にするかぎり、その対象を何らかの形で区別し、しかも頻度の相違の根拠を明らかにしてくれるような区別でなければならぬのであり、その意味で言えば、彼らの説明はそうならざるをえないのかもしれない。しかし、エコーの問題を別にして考えれば、前述のような説明でも十分であろうし（あるいは、その変形として、より複雑化した説明で十分であろう）、行動規範と特定の個人・機会という形での区別をしなくても済むであろう。

Sperber & Wilsonの場合は、失敗を成功としてアイロニー的に言うケースと成功を失敗としてアイロニー的に言うケースの両ケース、言い換えれば、賞賛による非難と非難による賞賛の両方向（賞賛 \rightleftharpoons 非難）が認められていることは明らかである。それに対して、一方向しか認めない研究者もいる。例えば、Barbe (1995, p. 10, p. 21, pp. 30–31) によれば、賞賛による非難には、真の非難が存在するが、非難による賞賛には、真の賞賛はありえず、たとえ賞賛が意図される時でも、そこには何らかの非難が意図されることになり、従って全ての例に必ず何らかの批判が意図されるという意味で、アイロニーの主要な目的が批判となり、賞賛は二次的あるいは追加的な目的をなすにすぎず、見せかけだけの賞賛であったり、ほんの僅かな賞賛であったりすることになる。また、アイロニーの大部分の例には、Platoの振り、Aristotleの賞賛による非難、そしてBrown & Levinsonの丁寧さの三つの要因があるとも言っている。つまり、賞賛による非難の一方向が前面に押し出され、逆方向の非難による賞賛の方は、全面的に否定されるというよりは、純粋に賞賛のみを目的にすることができず、必ずそこには非難が含まれることになるという意味で、その可能性を認めながらも、脇に追いやられてしまうのである。そのように考えていくことは、ある程度は、理解できると言えるかもしれない。純粋に賞賛だけを目的として発話したいのであれば、直接そのまま賞賛するような字義どおりの発話の方を選択すべきで、それを止めて、アイロニー発話の方を選択して、非難するような内容のことを言って、間接的に賞賛すれば、聞き手は話し手の意図に何らかの批判が含まれていると感じるのも理解できるからである。しかし、はっきりとじかに賞賛できないような人もいれば、そのような文化もあり、例えば、照れ隠しなどのように、わざと非難するようなことを言って、本当は賞賛したいということもあり、その意味から言えば、非難による賞賛を内容とするアイロニー発話において、いつも必ず批判が意図されているとは言い切れないであろう。従って、頻度という量的問題から見て、賞賛による

非難の方向の方が大部分を占めているので、アイロニーの主要な目的が批判であると言えるが、非難による賞賛の方向の方もごく一部分しか占めないとしても、そこには批判が含まれる場合だけでなく、照れ隠しなどが含まれることもあり、たとえ量的に少ないとはいえ、賞賛を目的とするアイロニーもある以上、賞賛⇄非難という両方向の存在を認めるべきであろう。そのような認識の上で、主要な目的が批判で、二次的な目的が賞賛であると言うことはできるが、それはあくまでも上記のBarbeの言う意味とは異なる。

話し手の態度と目的は、どのように区別されるのであろうか。すでに指摘したように、Barbe (1995, p. 79) には混乱・混同が見られる。例えば、「目的」というタイトルの下で、アイロニーの目的を丁寧な批判であるとした上で、そのすぐ後に、すでに引用したHymesの態度に関する記述が続くのである。あくまでも一例であって、Barbeに限定しているわけではない。今まで述べてきたことで、両者の相違は明らかになったと思われるが、ここでもう一度見ることにする。話し手の態度には、否定的なものから肯定的なものまでの範囲があり、話し手の目的には、非難と賞賛がある（賞賛⇄非難という両方向が可能であるため）ということ、すでに明らかにしてきたことである。もし頻度の高さから、あるいはその他の理由で、態度を否定的なものに限定し、目的を非難に限定し、その他の可能性を考慮に入れなければ、当然の事であるが、否定的な態度と非難という目的が得られる。そして、拒否、不賛成などをひっくるめて、否定的な態度としたように、非難、批判などをひっくるめて、否定的な目的とすれば、「否定的な」という共通性によって、態度と目的が容易に混乱・混同されるのが理解できよう。むしろ、態度と目的を同様なものとして扱っても、別に大きな問題にはならないと言ったほうがいいかもしれない。例えば、貴重な壺を割ってしまった人に対して、「それは素晴らしいことをしたね」とアイロニー的に言う場合、「それは馬鹿なことをしたもんだ」を意味するわけで、その発話によって話し手が示す態度にしる、目的にしる、ともに否定的であるという共通性があり、相手を批判する目的で、批判的な態度を示したと言えよう。または、別の角度から考えて、態度という概念の捉え方に食い違いが生じると言えるかもしれない。話し手が聞き手に示す態度は、自らの発話に対してなのか、それとも自らが最終的に伝えたいことに対してなのかによって、食い違いが生じてくるであろう。例えば、「それは素晴らしいことをしたもんだ」に対する態度として捉えるならば、話し手は自ら言ったことを信じてはいなし、聞き手に字義どおりに受け取られては困るのであり、そうならないようにするために、話し手は自ら言ったことを拒否することを聞き手に示さなければならず、従って拒否という否定的な態度を示すことになる。しかし、「それは馬鹿なことをしたもんだ」に対する（むしろ、という）態度として捉えるならば、聞き手を馬鹿にすることが最終的に伝えたいことであり、従って軽蔑という否定的な態度を示すことになる。ただし、後者の場合、話し手が最終的に伝えたいことというのは、話し手が発話をする目的でもあり、その目的を達成するために、最終的に伝えようと意図していることを発話を通して伝えるのであり、

従って態度でもあり、目的でもあることになってしまう。ともかく、態度と目的を区別する必要があるならば、後者の態度として捉えると、同時に目的にもなってしまい、区別できなくなってしまうので、前者の方を態度として捉え、後者の方を目的として捉えていかなければならないであろう。

態度と目的の混乱・混同の理由を二つだけ挙げたが、態度と目的の否定的な側面だけに限定するのではなく、肯定的な側面までも含むように拡大しなければならないとするならば、両者の区別は必要になってくるであろうが、それ以前の問題として、否定的な側面に限定するにしても、肯定的な側面まで拡大するにしても、いずれの場合であれ、両者の区別は必要であると言えよう。というのは、態度と目的は、本来異なるものだからである。どういうことであろうか。例えば、失敗したのに、「それは大成功だった」とアイロニー的に言う場合も、成功したのに、「それは失敗だった」とアイロニー的に言う場合も、発話に対する話し手の態度は、自ら言ったことを信じていないし、聞き手にも信じて、字義どおりに受け取られても困るので、ともに拒否という否定的な態度なのである。もしそうならば、成功を内容とする発話によって失敗を伝える場合（成功→失敗、言い換えれば、賞賛→非難）だけでなく、失敗を内容とする発話によって成功を伝える場合（失敗→成功、言い換えれば、非難→賞賛）も、つまり、非難を目的にする場合だけでなく、賞賛を目的にする場合も、目的は大きく異なっても、両方とも拒否という否定的な態度で一致するのである。従って、非難⇄賞賛の両方向とも、目的が大きく異なっても、それとは関係なく、否定的な態度が示され、態度と目的がはっきりと区別されることになる。ただし、非難と賞賛という概念、さらには否定的と肯定的という概念によって、全ての例がきちんと納まるとは言えないであろうが、少なくとも不必要な混乱を避けるという意味で、態度と目的を明確に区別しておくことは必要である。

最後に、聞き手がアイロニーに気が付くきっかけとなる合図について、少し触れてみることにする。「アイロニーは、危険な仕事だ」と言われるように、聞き手がアイロニーであると気が付き、更に背後に隠れている真の意味を見つけ出そうとするように仕向なければならず、そうでなければ、話し手は危険な状態に陥ることになってしまう。そこで、重要になるのが、話し手の自らの発話に対する態度であり、その態度を聞き手に示し、聞き手が理解できるようなきっかけとなる合図がどうしても必要になってくる。聞き手にしてみれば、発話を聞いて、単純に字義どおりに受け取る可能性は十分あり、話し手が出す合図を手がかりに読み取るしかないのであり、話し手が合図を出さなかったり、出しても、はっきりしないものであったりすれば、アイロニーとは気付かずに終わってしまう。合図の例として最も多いのが、話し手の声の調子である。発話の際の声の調子で、発話に対する話し手の態度を読み取るのである。もう少し、Barbe (1995, pp. 76-77) の分類を参考にして、具体的に合図となるものを見てみよう。言語の形態、直接のコンテキスト、二人の相互作用、より広範囲のコンテキストの四つに分類される。更に、言語の

形態の中には、イントネーションの合図（音節あるいは語の強勢、異なる声の高さ）、コンテクストに合わない語、矛盾する節、発話の内容と矛盾する表現方法、言語使用域の変化などが含まれ、直接のコンテクストの中には、身体動作などの言語外的手がかり、参加者の個人的特質、社会状況、文化状況などが含まれる。簡単に言えば、言語に直接関わりのある言語的手がかり、そして言語に関わりのない非言語的手がかりに大別でき、とく非言語的手がかりは、非常に大きな広がりを持つのである。具体的な検討はここでは行なわないが、発話だけではアイロニーに気付くことはできず、無数とも言える言語的手がかりと非言語的手がかりを読み取ることで理解するのであり、聞き手側から見れば、合図（言語的・非言語的手がかり）を読み取り、そのことで話し手の発話に対する態度を理解し、そこで話し手の真の意図を理解するという過程を経ることになり、その過程の最初に位置する合図が重要になると言える。つまり、話し手が合図を出すかどうか、どのような合図を出すか、どのような方法で合図を出すか、合図をはっきりした形で出すか、それとも曖昧な形で出すか、その他のことが、聞き手にとってのアイロニー理解の重要な鍵になるのである。

3-2. アイロニーの種類

全てのアイロニーが反対という概念に基づいて定義することができるのであれば、話し手の言うこと（字義どおりの意味、文の意味、その他）と伝達しようとするもの（文彩の意味、含意、話し手の意味、発話の意味、その他）の反対の関係で全てのアイロニーの例が説明でき、その反対の関係で説明できない例はアイロニーではないと言えいいことになる。もしそうならば、二つのもの（研究者によって言い方は異なるが）が反対の関係にあることを基準にして、アイロニーであるかどうか判断でき、反対の関係という特徴を持つアイロニーが一種類あるだけとなる（勿論、その内部を分類することはできる）。しかし、それに対して、反対の関係では説明できないが、それでもアイロニーであると言える例があると主張する研究者がいる。もしそうならば、反対の関係という特徴を持つアイロニーとそうでないアイロニーの二種類が少なくとも存在することになる。そして、後者のような主張は、反対という概念による定義への批判の根拠として、極めて大きな位置を占めるものである。また、反対という概念による定義は、アイロニーに関する伝統的定義、SearleとGriceの定義などと言われるものであり、現代でも広く受け入れられており、標準的定義とも言えるものであり、一つの大きな流れをなしているだけに、それへの批判は重要な意味を持つものと言えよう。勿論、そのような批判への反論として、反対の関係で説明できないものは、アイロニーと呼ぶ必要はなく、アイロニーの範囲をそこまで限定し、拡大すべきではないということもできようが。そのことは別にして、最近の流れとして、反対の関係では説明できないアイロニーを認める傾向は強く、軽視あるいは無視すべきものではないと思われる。そこで、それを含めた形で、アイロニーの種類を調べるが必要になろう。ここでは、

非常に参考になるBarbe (1995, pp. 16–31) を調べることにする。

Barbeは、多くの研究者の使用するアイロニーの例を調べ、三つの主要な範疇に分類する。例えば、表面の文の意味と裏に潜む話し手の意味の関係で、単純化して、表面の意味 (the surface meaning) と裏に潜む意味 (the underlying meaning) の関係で、両者が異なる場合 (簡単に相違 (difference) と呼んでおり、非字義的アイロニーのこと)、両者が一つにまとまって、同一に見える場合 (簡単に字義性 (literalness) と呼んでおり、字義的アイロニーのこと)、そして皮肉 (前の二つによって実現化されるものであるが、アイロニーの一形態としての皮肉の定義が論議的になっているため、他とは分けて調べる必要があるとしている) の三つに分類する。更に、新奇な、独創的な、あるいは一時的なアイロニー (簡単に一時的なアイロニー (nonce irony) と呼んでいる) とありふれたアイロニー (common irony) の区別を組み合わせている。つまり、相違、字義性、皮肉に大別され、相違が更に一時的なアイロニーとありふれたアイロニーに細分化されるのである。なお、よりはっきりさせる意味で、相違と字義性という用語の代わりに、非字義的アイロニーと字義的アイロニーという用語を使用することにする (それらは、Barbe自身が使用している用語である)。また、Barbeにとっては、アイロニー発話の目的は批判 (より正確には、暗示的批判 (implicit criticism) のこと) であり、全ての場合に共通するが、ありふれたアイロニーよりは、一時的なアイロニーの方が批判という目的を首尾よく達成しやすとしている。というのは、ありふれたアイロニーは、使い古されて、ごく普通に見られるようになったものであるが、一時的なアイロニーは、使い古されておらず、ありふれたものでなく、より新しいものだからである。更に、大部分の話し手は、字義的アイロニーよりは非字義的アイロニーの方をより好んで使うとしている。

まず最初は、非字義的アイロニーの中の一時的なアイロニーについてである。一時的なアイロニーとは、アイロニーの目的のために習慣的に使用されてこなかったし、その新奇さを失わなかった実例によって例証されるものであるとしている。八つの実例 (他の研究者が実際に使用した例のこと) を挙げているが、二つだけ取り上げることにする。

(1) ブレングは、デトロイトが嫌いだが、そこで夏を過ごす必要が出てきて、そこで “I have always wanted to spend the summer in Detroit” (「私はいつもデトロイトで夏を過ごしたいと思っていたの」) (Alice Myers Roy (1981), “The function of irony in discourse”, *Text*, 1. 4. 407–423) と言う。彼女が自らの運命を嘆き悲しむという意味で、不平に結び付いた批判となる (批判が主要な目的で、不平が二次的な目的になる)。そして、彼女はデトロイトで夏を過ごしたいなどは一度も望んだことはなかったので、自ら言ったことの反対のことを意味している。なお、Aristotleの賞賛による非難の例であると言っている。また、面目を保つという行為がなされている。

(2) 純粋に賞賛のみを目的にすることはできず、必ず批判が含まれるとしている例である。

ハーマンは、いつもAの成績（「優」の成績のこと）を取っているのに、自分の成績のことを絶えず心配している。彼は再びテストで優秀な成績を取り、それに対してリサが“I see you got your usual low score”（「あなたはいつもの悪い点を取ったのね」）（Anne Cutler (1974), “On Saying what you mean without meaning what you say”, *Papers from the 10th regional meeting of the Chicago Linguistic Society*, 117–127）と言う。彼女は暗に彼を賞賛しているように思えるが、実際は主として彼のことを批判しており、しかも彼女は彼の面目を保っている。というのは、*I wish you wouldn't whine about your stupid scores*（あなたはくだらない点数に泣き言を言わないでほしいわ）と云えば、彼は守りの態勢に入ってしまうからである。

次は、非字義的アイロニーの中のありふれたアイロニーについてである。ありふれたアイロニーとは、アイロニーが繰り返し使用されて、どこにもあるごく普通のものになり、ありふれた言い回しとなって固定化されたものである。従って、ある一定の言い回しがいつもアイロニー的解釈のきっかけになるように思えるし、批判の効果が失われてしまうこともありうる。

- (3) 四つの実例を挙げているが、個々の説明は止めて、ありふれた言い回しだけを取り上げることにする。Joe is a fine friend（ジョーは立派な友人だよ）の中のfine friend, Has Harry stopped giving those wild, fun parties?（ハリーは、あの野性的で、おもしろいパーティーをやるのを止めてしまったのかい）の中のwildとfun（下線部は強勢の置かれる位置を示す）、That's a likely story（それはありそうな話だ）の中のlikely story、そしてYou're a real winner（君は真の勝利者だ）の中のreal winnerは、アイロニーを示すものとして理解される。つまり、立派な友人ではないこと、退屈で、つまらないパーティー、話を信じていないこと（あるいは、嘘）、敗者であることを伝えているのであり、批判をしている。そこには、面目を保つという行為が見られる。

二番目の字義的アイロニーについてである。字義どおりの意味、あるいは文の意味だけとして解釈されるように意図される字義どおりの発話が、アイロニーとみなすことができる場合がある。その場合は、表面の意味と裏に潜む意味の間に、反対という関係あるいは逸脱は見られない。そのような字義的アイロニーが不一致を示すことがあるが、その不一致は、すぐ近くの状況あるいは遠く離れた状況から生じる。そして、非字義的アイロニーと同様に、暗示的に批判し、そのことによって面目を保つことができる。六つの実例が挙げられているが、二つだけ取り上げることにする。

- (4) ジョアンは、車を運転している。左に曲がる時、合図を出さず、危険な状況に巻き込まれる。サリーは“I love people who signal”（「私は合図を出す人が好き」）（Alice Myers Roy (1977), “Toward a definition of irony”, in R. W. Fasold and Roger W. Shuy, *Studies in language variation*. Washington, DC : Georgetown University

Press, 171–183) と言う。サリーは, she does not love *all* people who signal (彼女は合図を出す人全員が好きなわけではない) ので, 誇張しており, むしろ合図を出さない運転手よりも, 合図を出す運転手の方が好きなことを伝えている。従って, サリーは, 合図を出さなかったジョアンを批判する目的で, 誇張法で真実を言っている。そして, サリーは, ジョアンの運転能力を露骨に疑わないことで面目を保っている。また, 他の同乗者も危険な状況に気が付けば, 問題なくアイロニーを認識し, 理解する。

- (5) 文の意味の段階でアイロニーを示す別の方法は, ある特定の要素の省略あるいは誇張である。それは, 換喩的アイロニー (metonymical irony) と呼ばれるものである。

Ruth: “How was your blind date?”

(ルース: 「ブラインド・デート (面識のない男女のデート) はどうだった。」)

Sandra: “He had nice shoes.”

(サンドラ: 「彼は素敵な靴を履いていた。」)

(Ellen Winner (1988), *The point of words*, MA: Harvard University Press, 27)

サンドラは, たった一つだけの特質でデートを述べることで, 楽しく過ごせなかったことをルースに伝える。彼女は字義どおりに真実を言っているが, 重要な特徴の省略 (相手の人について, 相手の人の個性について) と重要でない特徴の誇張 (靴) によって, 靴の状態以上のことを伝える。

三番目の皮肉について, 二つの実例を挙げているが, 省略して, アイロニーと皮肉の関係の記述だけを取り上げることにする。アイロニー (irony) と皮肉 (sarcasm) という二つの概念は, 密接に関わっており, 時には重なり合う部分も出てくるが, 面目を保つ批判と面目をおびやかす行為として区別することもできる。結論としては, 皮肉は, アイロニーの中に含まれるが, 疑い (非皮肉的アイロニーの例 (non-sarcastic instances of irony) には見られる, いわゆる疑いの恩恵と言えもの) の余地を残さないために, 話し手が面目を保とうとして, あとで *I did not mean it* (そんなつもりじゃなかった) と言うことができないという特徴を持っている。それでも, 皮肉の場合, 聞き手側が面目を保つことはできる。聞き手が話し手に同意しなければ, 返答する必要はないし, 発話を無視することができるからである。ともかく, 皮肉は, 潜在的に面目をおびやかす, しかも攻撃的な批判であり, アイロニー的解釈を強要するものである。

以上がBarbeの分類の概要である。なお, 皮肉については, アイロニーの一部として, その中に入れるにしても, 一番目・二番目と同次元で処理できるものではないと思われるので, 皮肉を切り離して, 考えていくことにする。なお, 上記のように, アイロニーを非字義的アイロニー, 字義的アイロニー, 皮肉の三つに分類する以外に, アイロニーを大別して, 面目を保つ批判と面目をおびやかす批判にまず分けて, 次に前者を非字義的アイロニーと字義的アイロニーに分けて, 更に前者を一時的なアイロニーとありふれたアイロニーに分けるという具合に, 分類することは

可能であろうし、またアイロニーを非字義的アイロニーと字義的アイロニーに分けて、前者を一時的なアイロニーとありふれたアイロニーに分けるだけで済まし、皮肉はそれら全体に組み込むという分類も可能であろう。ともかく、ここでは非字義的・字義的アイロニーについて、考えてみたい。

上記全体に共通して言えることは、批判を目的とすることである。批判と言っても、より正確には、intended criticism(意図した批判)、implicit criticism(暗示的批判)、face-saving criticism(面目を保つ批判)、polite criticism(丁寧な批判)、verbal irony as a face-saving hidden expression of criticism(面目を保つ、隠された批判の表現としての言葉によるアイロニー)などと言われているように、直接的で、すぐにそれと分かるような批判ではなく、間接的で、聞き手を含む関与者にとってすぐには分からず、またすぐに分かるように意図されるのではなく、それによって面目を保ち、丁寧な言動になるような批判のことである。そこには、批判と丁寧さの強い結び付きがあり、一見矛盾するような批判と丁寧さは、間接的で、暗に示すことで、面目が保たれるという関係で結び付けられている。そのことは、(1)から(5)までの非字義的・字義的アイロニー全てに当てはまることになる。つまり、アイロニー全ての目的が、一言で言えば、批判ということになる。ただし、批判には、暗に示すという意味で、程度の差が生じることがあるとしている。例えば、一時的なアイロニーの典型的例である(1)の方が、(3)のありふれたアイロニーと比べれば、暗に示す批判という効果がより大きくなる。というのは、(3)は決まり文句のようなもので、習慣的に、繰り返し使用されて、型どおりの言い回しになってしまっており、その言い回しを聞けば、すぐにアイロニーであることが分かかってしまい、批判を内容とする字義どおりの発話に近い効果(直接的批判)となり、暗に示すという効果が薄れてしまうからである。そして、字義的アイロニーの(4)と(5)も、暗に示す批判という効果は非常に強く、(1)よりも大きな効果を生み出すと言えるかもしれない。「暗に示す」程度が高ければ高いほど、面目を保つ程度が高くなり、丁寧さが増すが、「暗に示す」程度が高すぎると、アイロニーであることに気が付かず、批判として受け取らないことになるであろう。「暗に示す」程度(あるいは、間接性の程度)と「明白に示す」程度(あるいは、直接性の程度)の兼ね合いは、当然の事として、個々の発話状況によって異なってくる。非字義的アイロニーの個々の実例によって異なるし、同様に字義的アイロニーの個々の実例でも異なってくるであろう。しかし、非字義的アイロニーの場合、言われることの反対のことを伝えるという特徴があるのに対して、字義的アイロニーの場合、反対のことを伝えるという特徴はなく、何を伝えようと意図しているのかが必ずしもはっきりしないこともあり、従って字義的アイロニーの方が、非字義的アイロニーと比べて、「暗に示す」程度が高く、暗に示す批判という効果が大きくなると言えるかもしれない。

非字義的アイロニーに属するとみなされる例の中には、言われることの反対のことを伝えるという特徴を持たないものもあると言われている。勿論、反対の関係で説明できないものは、アイ

ロニーと呼ぶ必要はないとするような意見も、全く根拠がないものとは言い切れないであろうが、ここではこれ以上関わらないことにする。反対の関係で説明できない例は、Barbe (1995, p. 20) の挙げた例の中にもある。それは、Sperber & Wilson (1981, pp. 315–316) の冗談の意味合いを持つアイロニー発話（転倒した少年に向かって、*It's a bird—it's a plane—it's Superman*（鳥だ、飛行機だ、スーパーマンだ）という有名な文句を言う例で、その反対の*It's not a bird, it's not a plane, it's not Superman*（鳥ではない、飛行機ではない、スーパーマンではない）を単に伝えようとしているわけではないとしている）のことで、反対という関係では説明できない良い例であろう。ただし、よく知られている有名な文句を使用し、しかも冗談の意味合いを持たせるようなアイロニーは、反対の関係で単純に説明できないのは事実であるが、それをどのように処理するかは、問題となろう。

また、Gibbs (1993, p. 264) も、反対という概念に基づく伝統的見方を批判するために、次の例を使用する。あなたが仲の良い友人にひどいことをし、彼があなたに“thanks”（「ありがとう」）と言う場合である。「ありがとう」と反対の関係にあるものは、“no thanks”（「いや、結構です」）であるが、伝えようと意図していたものは、“you have done something that I do not appreciate”（「あなたは、私がありがたく思わないことをした」）であり、「ありがとう」と「あなたは、私がありがたく思わないことをした」は、反対の関係にないので、反対という概念では説明できないとしている。しかし、二段階に解釈して、「ありがとう」と言うのは、普通、「あなたは、私がありがたく思うことをした」に対してであり、それと「あなたは、私がありがたく思わないことをした」は、反対の関係にあると考えることはできる。勿論、反対という概念は、「言われることの反対のこと」の意味で、話し手の言うことと話し手の伝達しようと意図するものの反対の関係のことであり、様々な言い方がされるが、Barbeの場合は、表面の意味と裏に潜む意味の関係として捉えられているのである。従って、「ありがとう」と「あなたは、私がありがたく思わないことをした」の関係を問題にしているのもであり、そこには反対の関係は成立していない。ただ、その背後に、別の意味での反対の関係が関わり、それが重要な役割を果たしていることは明らかであろう。そして、そのような二段階の解釈は、Yamanashi (1997, p. 273) にも見られる。彼は、否定的に捉えており、しかも隠喩とアイロニーの組み合わせを扱っているので、同一扱いはできないが、二段階の解釈の意味、更に前のスーパーマンの例の理解には、興味深いものと言えよう（スーパーマン本人ではなく、少年に向かって「鳥だ、飛行機だ、スーパーマンだ」と言っている）。彼の例は、*Bill is another Chomsky!*（ビルは、もう一人のチョムスキーだ）が、まず第一段階で、隠喩なので、*Bill is a real genius*（ビルは真の天才だ）を意味するものと解釈し、次に第二段階で、アイロニーなので、*Bill is an idiot*（ビルは馬鹿だ）を意味するものと解釈するというものである。そして、「ビルはもう一人のチョムスキーだ」のアイロニーの意味は、その字義どおりの意味を単に否定したり、反対にした

りしても、得られないとして彼は批判する。勿論、「ビルはもう一人のチョムスキーだ」と言っ
て、「ビルは馬鹿だ」をアイロニー的に意味する場合、両者の間には反対の関係は存在しない。
ただし、その背後では、「ビルは真の天才だ」と「ビルは馬鹿だ」の間で、別の意味での反対の
関係は成立する。つまり、二段階の解釈では、何らかの形で反対という概念が関わりを持ち、そ
のことで全体の解釈を可能にしているのである。なお、彼の例は、隠喩的発話を対象にしている
ので、隠喩の解釈のために一段階増えて、結果的に二段階になったにすぎず、前のGibbsの例に
おける二段階の解釈とは異なる。しかし、そのような相違はあるが、表面的には反対の関係が見
い出せない例でも、その背後を見ることで、反対の関係が見い出せることがあるということは、
明らかになるであろう。

その他に、言われることの反対のことを伝えるという特徴を持たない例としては、反対という
概念の捉え方の相違によるものも考えられよう。前に詳しく調べたが、ここでは狭義の反対とい
う概念については、対極に位置する関係、正反対の関係、反対語（反意語）の関係に限定した範
囲として捉え、広義の反対という概念については、それらの他に、それらの関係を緩やかに捉え、
更に矛盾・否定、非両立、不適合なども含めた範囲として捉えたが、ここでは少し視点を変えて、
厳密な意味での反対という概念として、反対、矛盾・否定を含む範囲を考え（そのような捉え方
は、広く見られるもので、例えば、前掲のスーパーマンの例も、「ありがとう」の例も、反対と
いう概念を否定として捉えているように）、緩やかな意味での反対という概念として、反対、矛
盾・否定を緩やかに捉えるだけでなく、更に拡大して、非両立、不適合なども含む範囲を考
えることにする。それらの概念を使用して言えば、厳密な意味での反対という概念に基づいて、言
われることの反対のことを伝えていない例も、緩やかな意味での反対という概念に基づけば、言
われることの反対のことを伝えていることになることがある。とくに、反対という概念によるアイ
ロニーの定義に批判的な研究者には、反対という概念を厳密な意味で捉え、それでもって反対の
関係では説明できない例があるとする傾向があるように思われる。ともかく、前掲の(1)から(3)ま
での非字義的アイロニーの例は、厳密な意味で捉えても、反対の関係が成立するものであると言
える。(1)では、デトロイトで夏を過ごしたいなどは一度も望んだことはなかったこと、(2)では、
いつもの良い点を取ったこと、(3)では、立派な友人ではないこと、退屈で、つまらないパー
ティー、話を信じていないこと（あるいは、嘘）、敗者であることなどが裏に潜む意味であると
考えることができれば、話し手が実際に言ったことの表面の意味とは、厳密な意味でも反対の関
係が成立できることになる。

非字義的アイロニーに属するとみなされる例について、反対という概念による説明に否定的な
態度から、言われることの反対のことを伝えるという特徴を持たない例がいろいろと示されるが、
上記のように、とりあえず三つの種類を見てきた。量的に多いとは言えないもので、その意味で
は、非字義的アイロニーには、言われることの反対のことを伝えるという特徴があるという言い

方は可能であろうし、もしそれが無理であれば、幾つかある特徴の中で、一つの、しかも非常に重要な役割を果たすものであるという言い方は可能であろう。そのことは別にして、上記のことで明らかのように、どのような形であれ、反対という概念でアイロニーがどこまで説明できるかを解明することは、必要であり、重要であると言えるのであって、反対という概念を簡単に諦めることは避けるべきであろう。

次に、字義的アイロニーの方は、どうであろうか。言われることの反対のことを伝えるという特徴がないとされるのが一般的である。ここでは、そのようなものとして捉え、それ以上問題にしないで済まし、別の角度から字義的アイロニーを見ることにする。字義的アイロニーは、例えば、(4)と(5)は、言われることの反対のことを伝達しようと意図しているわけではなく、言われることそれ自体を伝達しようと意図しており、「私は合図を出す人が好き」と言って、そのまま「私は合図を出す人が好き」を伝えており、「彼は素敵な靴を履いていた」の場合も同様で、発話が字義どおりに受け取られることを意図し、それでいてアイロニーなのである。ただし、発話が字義どおりに受け取られることを意図し、それだけで終わってしまえば、ごく普通の字義どおりの発話であって、それをあえてアイロニー発話とする必要はないであろう。アイロニーとするには、それ以外に、合図を出さない運転手よりは、合図を出す運転手の方が好きなことを伝え、そのことで合図を出さなかったジョアンを批判したり、デートで楽しく過ごせなかったことを伝え、そのことでデートの相手を批判したり、あるいはブラインド・デートというものがいかにひどいかを批判したりする。そこで、反対の関係が成立するアイロニーでは、話し手が真実でないこと（虚偽）、あるいは真実と信じていないこと（虚偽と信じていること）を言っており（発話が偽である）、従ってそれとは反対の関係にあるものを伝えることになるが、反対の関係が成立しないアイロニーでは、真実、あるいは真実と信じていることを言っており（発話が真である）、従ってそれと反対の関係にあるものを採る必要はないが、それ以外に、何かを伝えることになると言えよう。

もし字義的アイロニーの場合、発話が字義どおりに受け取られることを意図し、それ以外に、何かを伝えようと意図するのであれば、Sperber & Wilson (1981, p. 299) のGriceへの批判の仕方が問題になるであろう。詳しい検討はせずに、次のことだけを取り上げることにする。彼らに従えば、話し手は字義どおりの意味に加えて、あることを伝えようとするのが、標準的な含意の場合ということになり、それに対して、普通は、話し手は字義どおりの意味の代わりに、あることを伝えようとするのが、アイロニーの場合ということになる。そして、すでに述べたように、1981年の論文での主張は、その後も実質的な変更もなく、継続されていると彼らは言っているのである。そのまま受け入れるならば、今述べたことも変更されていないと考えられる。そこで、問題となるのは、非字義的アイロニーの場合、字義どおりの意味ではなく、その代わりにあることを伝えようとするのであるが（反対の関係にあるかどうかに関わらず）、字義的アイロ

ニーの場合は、(4)と(5)について述べたように、字義どおりの意味を伝え、それに加えてあることを伝えようとするのであり、従って字義的アイロニーはアイロニーではなくなってしまうということである。では、Sperber & Wilsonは、字義的アイロニーの存在を否定し、非字義的アイロニーの可能性のみを認めるのであろうか。しかし、例えば、Gibbs (1993, p.264), Barbe (1995, p.26)などは、Sperber & Wilsonの使用する例(1981年の論文で使用された例)を字義的アイロニーの例として利用しており、その意味で言えば、Sperber & Wilsonが字義的アイロニーの存在を認めていることになる。どちらが間違い・誤解をしているのであろうか。同様のことは、態度についても言える。非字義的アイロニーでは、話し手が真実でないこと、あるいは真実と信じていないことを言うのであり、その発話(虚偽)に対する話し手の態度は否定的なものになるが、字義的アイロニーでは、話し手が真実、あるいは真実と信じていることを言うのであり、その発話(真実)に対する話し手の態度は肯定的になる。そして、すでに明らかにしたように、Sperber & Wilsonは、否定的な態度の側面を前面に押し出すことで、肯定的な態度の側面が裏に隠れてしまい、否定的な態度のみを認めるように思われている。結果は同じである。彼らにとってのアイロニーとは、非字義的アイロニーに限定されたもので、字義的アイロニーの可能性が否定されてしまっていると見られるであろう。以上のことだけから言えば、字義的アイロニーの可能性を否定しており、アイロニー=非字義的アイロニーとして捉えていると見られてしまうであろう。このことについては、あとで再び取り上げることにする。

もし字義的アイロニーの存在が否定され、非字義的アイロニーしか存在しないとすれば、伝統的定義、Griceの定義、Searleの定義などのように、反対という概念によるアイロニーの定義は、多くの批判を受けながらも、より有利になると言えることになる。というのは、字義的アイロニーは、言われることの反対のことを伝えるという特徴を持たないものとして、反対という概念による定義にとっては、脅威の存在だからである。ただ、ここで簡単に字義的アイロニーの存在を否定することに同意することはできないであろう。更に詳しい検討が必要である。ともかく、ここで言えることは、アイロニーを漠然と捉えることによって、誤解や混乱が生まれ、思わぬ方向へと進んでしまうことがあり、それを避けるには、アイロニーを質的相違などによって幾つかに分類しておくことは必要であり、その一つの分類方法として、非字義的アイロニーと字義的アイロニーへの区別は、十分根拠のあるものだと言っていいであろう。

そして、目的と態度についても、次のように言える。もし非字義的アイロニーと字義的アイロニーを認めれば、批判という共通の目的を持ちながら、否定的な態度と肯定的な態度に区別できるし、もし非難⇒賞賛の両方向を認めれば、否定的な態度という共通性がありながら、否定的な目的(非難を目的にする場合)と肯定的な目的(賞賛を目的にする場合)に区別でき、結果的に目的と態度が明確に区別できることになり、アイロニーの分類と同様に、目的と態度の区別も誤解と混乱を避け、より深く理解するには必要なものであると言える。

3-3. 最近のアイロニーの定義

アイロニーについて、反対という概念による定義に対する批判の中で、高い評価を受け、多くの支持を得ているのが Sperber & Wilson のエコーという概念による定義であると言える。そして、前者に取って代わるものとして後者が位置付けられているだけに、その影響力は大きなものとなる。ただし、反対の関係という特徴を否定するものとして捉えるべきではなく、ただそれによってはアイロニーを定義することができないということを言っているにすぎない。つまり、発話がエコー的であるかどうかで、アイロニーであるかどうか判断されるが、そのことは、アイロニー発話が反対の関係という特徴を有することを全面否定するものではない。

Sperber & Wilson (1986, p. 238) は、エコー発話を次の例で説明している。

Peter : The Joneses aren't coming to the party.

Mary : They aren't coming, hum. If that's true, we might invite the Smiths.

(ピーター：ジョーンズさんたちはパーティーに来られないんだって。

メアリー：ふーん、来られないの。だったら、スミスさんたちを招待しましょうか。)

メアリーの最初の文である They aren't coming は、ピーターの言った The Joneses aren't coming to the party をエコーしており、ピーターに彼の言ったことを報告することではなく、メアリーが彼の発話に注意を払って、その発話の信頼性や含意を慎重に判断しているという証拠を与えることで、関連性が達成されるとしている。そして、すでに引用したように、彼が「ピクニックに出かけるにはいい日だね」と言うのに対して、彼女が「本当にピクニックに出かけるにはいい日だね」と言う場合、彼女が天気が良くてそう言うのであれば、エコーされる意見を是認しているので、エコー発話であるが、アイロニーとは言えず、彼女が雨が降っているのにそう言うのであれば、エコーされる意見を軽蔑の気持ちで拒否しているので、エコー発話であり、しかもアイロニーになるとしているように、エコー発話+話し手の態度(拒否や不賛成などの否定的な態度)によってアイロニー発話が判断されることになる。より具体的には、発話がエコー的であるという認識、エコーされる意見の出所の同定、そしてエコーされる意見に対する話し手の態度が、拒否と不賛成のいずれかであるという認識の三つの要素によって、アイロニー発話が判断されることになる。

以上のことを踏まえて、反対という概念による定義を次のように批判する (Sperber & Wilson, 1986, pp. 240-241)。一旦停止していたドライバーが左右何も見えない道路に入ろうとした時、私が There's something coming (何かこっちに向かってくるよ) と言ったために、ドライバーが慌てて急ブレーキを踏み、左右を見るが何も見えなかった。私の言ったことは明らかに偽であり、ただ道路には何も見えないことをドライバーに再確認しようと意図しただけで、伝えようとしていたのが There's nothing coming (何もやってこない) であつたでしょう。そのようなケースは、反対という概念による定義の条件を満たしているが、不合理であるとして否定し、

それでは本物のアイロニーと区別のできないと批判している。そこで、そのケースを書き直して、慎重すぎるほど、絶えず危険を避けようと注意を向けており、どんなに遠くても、車がこちらに向かってるのが見えれば、決して道路に進入しないドライバーが、遙か遠くに、かすかに見える自転車しか目に入らなかったのも、道路に入ろうとした時、私が非難するように「何かこっちに向かってくるよ」と言ったとしよう。その発話は、ドライバーがいつも言い表わしている意見をエコーさせており、明らかにばかげたものとして受け取られるような状況で行なわれているのであり、従って「何かこっちに向かってくるよ」をアイロニーにさせているのは、エコーの要素、そしてあざけりや不賛成といった話し手の態度だけで十分であるとしている。

では、エコーという概念による定義は、どのように評価すべきなのであろうか。ここでは、彼らのアイロニーのエコー理論 (the echoic theory of irony) 全体を詳しく検討することはできないので、彼らの理論を評価する上で重要な鍵となるエコーという概念に的を絞って、幾つか気が付いたことだけに限定して見ていくことにする。まず言えることは、上記のような典型的な、あるいは標準的なエコーを見ているかぎり、大きな問題は生じないであろう。話し手が他の人の言ったこと (発話、意見、思考など) をそのまま繰り返して言い (こだまのように反響させて)、その言ったことに対して自らの態度を聞き手に示し、そのことでアイロニーを理解させることになる。しかし、全てがそのように処理できるわけではない。反対という概念による定義の場合、反対という概念では説明できない例を挙げることで批判されたのと同様に、エコーという概念では説明できない例を挙げることで批判できるからである。また、反対という概念をより緩やかで、拡大した形で解釈することによって、批判に対する反批判ができるように、エコーという概念を拡大解釈することで、批判に対する反批判が可能となる。それは、正に Sperber & Wilson が行なっていることである。エコーという概念の解釈を拡大すればするほど、それによって処理できる範囲を広げることができ、結果的にエコー理論の正当性を主張できる可能性を高めることができるのである。例えば、Sperber & Wilson (1997, pp. 284–286) が、The notion of echo we used in analysing irony is a technical one ; it is deliberately broad, and goes beyond what would generally be understood by the ordinary-language word ‘echo’ If the notion of echo were more restrictively defined, the theory would fail to explain these aspects of irony. (アイロニーを分析する際に私たちが使用するエコーという概念は、専門的で、特殊なものである。その概念は、よく考えた上で、広範囲に及ぶものになっており、日常言語の「エコー」という言葉によって一般的に理解されているものよりは遥かに広範囲に及んでいる。…もしエコーという概念がもっと制限的に定義されたなら、その理論はこれらのアイロニーの諸側面を説明できなくなるであろう。) と言っていることから明らかであろう。また、彼ら (1997, p. 290) は、エコー理論の普及に伴って、反対という概念とエコーという概念に対する重要性の認識が逆転し、正しい方向へと進んでいるが、更に進んで、反対という概念による定義

が全面的に、完全に否定されるようになることが必要であるとしている。

反対という概念による定義を全面否定し、それに完全に取って代わるためには、エコーという概念の解釈の仕方、とくにエコーの出所 (echoed source: エコーされる対象がどこから出てくるのか)、あるいはエコーの材料 (echoed material: エコーの対象になりうるものは何か) と彼らが呼ぶものをどこまで広げるかが重要になってくる。具体例は省略して、彼らがエコーの出所・材料をどこまで広げているかを簡単に見ると、次のようになる。例えば、1981年の論文 (pp. 306–308, p. 310) では、直前の話相手の発話、しばらく前の話相手の発話、更に遠くの出所 (聖書の言葉など) などの話し手以外の実際の発話をエコーしたり、話相手の含意、予測、思考などの話し手以外の、いわゆる想像上の発話 (相手が含意していることを言ったり、相手が多分言うであろうと予測していることを言ったり、相手が考えていることを言ったりすること) をエコーしたりするとしており、話し手と聞き手の個人の関係 (なお、聖書の言葉は異なるが) を出所としている。また、人が抱く希望や期待をエコーすることもありうるとしている。1986年の著書 (pp. 238–239) では、ある特定の人に帰属する思考だけでなく、ある種の人 (a certain kind of person) の思考、一般の人々 (people in general) の思考もエコーできるとしており、また話し手以外の人々の思考だけでなく、話し手自身の過去における思考もエコーできることになる。1997年の論文 (pp. 284–286, p. 288) では、エコーの材料の種類として、一般的な規範と欲求、これらの特定のケースへの特別の適用、誰かに帰属する過去、現在、あるいは未来の思考、そして実際の、あるいは想像上の発話が表示されている。結局、実際に言葉で言い表わされる発話だけでなく、言葉では言い表わされていないが、想像上で、言うであろうと思われる発話までも含み、実際の発話では現在、近い過去、遠い過去までカバーし、想像上の発話では過去、現在、未来までもカバーし、特定の個人だけでなく、ある種の人、一般の人々、更に不特定多数を含む社会一般、文化一般までも含み、話し手以外の人だけでなく、話し手自身までも含み、非常に曖昧な一般的規範と欲求、そしてそれらの個別ケースへの適用まで含むという具合に、エコーの出所は極めて広い範囲をカバーすることになってしまっている。勿論、彼らが言うように (1997, p. 284)、無限に広がっていくことはなく、制限が存在するが、それでもエコーの対象が非常に広い範囲に及んでいることには変わらない。そうした背景があるからこそ、言葉によるアイロニーは、いつも必ずエコー的であると彼らは断言できるのである。

エコーという概念を拡大解釈するにしても、どこまで広げるかによって、アイロニーを全てエコー的であるとするか、それともそれ以外の要素 (例えば、反対という概念) を認めるかに分かれてしまう。一つの例として、上記の最後に挙げた分類を使えば、とくに一般的な規範と欲求、そしてそれらの個別ケースへの適用が問題となる。例えば、Gibbs (1993, p. 265) によれば、二週間以上も雨が続けている時に言われる “another gorgeous day!” (「今日もまた、素晴らしい日だ。’) という発話は、誰かの発話、思考、意見をエコーするものであるとする必要はなく、

良い天気に対する一般的な期待あるいは欲求を暗に示すもので、そうすることで、話し手の天気への失望を表すことになる。しかし、Sperber & Wilson (1981, p. 310) によれば、大雨の時に言われる *What lovely weather.* (なんと素晴らしい天気だ。) という発話は、三つの可能な解釈の内、二つがそれ以前の発話をエコーするものであるが、もう一つとして、人は良い天気を希望しながら、あるいは期待しながら散歩に出かけるのが普通であり、従ってそのような以前の強い希望などを単にエコーしているにすぎないことになる。同様の発話状況の下で、しかも同様の発話が、良い天気への一般的な期待・欲求・希望を示すとする点では一致するが、一方ではエコー的でないとし、他方ではエコー的であるとしている。

同様の例は、他にもある。例えば、Seto (1997, pp. 242–243) は、エコー的アイロニーと非エコー的アイロニーに区別し、エコーという概念と反対という概念によって前者と後者のそれぞれが説明されるとしている。非エコー的アイロニーとして、次の例を挙げる。

A: Bob has just borrowed your car. (ボブがたった今君の車を借りていってしまったよ。)

B: Well, I like that. (ほう、そいつはいい。)

そこで、エコーの出所をいくら探しても、直前や遠くを探しても、そのような思考を抱く人を求めて、Bさん、他の人、ある種の人、一般の人々を探しても、見つけ出すことはできないが、Bが怒っていることは事実で、従ってその発話はアイロニーであり、しかも非エコー的であるとしている。Hamamoto (1997, pp. 260–261) も、非エコー的アイロニーの存在を認め、次の例を挙げる。階段を踏み外した時に言われる *Oh, great. That's nice!* (おお、素晴らしい。見事だ。) という発話、風の強い日に、風に吹かれて乱れた髪をして教室に入ってきた友人に言われる *You look perfect in your new hair style.* (あなたの新しい髪型はよく似合っているみたい。) という発話などは、アイロニーであるが、エコーの出所を突き止めることができず、従って非エコー的となる。彼らの批判に対する反批判として、Sperber & Wilson (1997, pp. 284–285) は、一般的な規範と欲求、あるいはそれらの個々のケースにおける具体化にエコーの出所を求め、それらをエコーするとしている。例えば、「おお、素晴らしい。見事だ。」には、物事が明らかにそうではないのに、素晴らしいと強調して言うのは、物事がうまく行ってほしいといつも強く欲しているからで、そのようないつも欲しているものの表示をエコーしていると説明され、同様に、「ほう、そいつはいい。」には、物事が好きになれるようにしたいという普遍的な欲求をエコーしていると説明され、「あなたの新しい髪型はよく似合っているみたい。」には、少し違って、外見に関して標準的に求められるものより特定化された表示をエコーしていると説明される。つまり、エコーの出所が突き止められないという理由で、エコー的でないと言われたアイロニーが、普遍的な欲求、そして個々のケースで具体化され、特定化された欲求をエコーするものとして、エコーの出所が見い出される結果になる。

以上の比較で明らかのように、エコーという概念の解釈をどこまで拡大するかによって、エ

コー的アイロニーの範囲が異なってくる。まず最初に言えることは、エコーという概念が持つ意義を評価すべきであるということである。ある発話が前後に関係なく、唐突にアイロニーであると言われても、聞き手がそう理解するのは難しく、字義どおりに受け取る危険性は十分ありうる。ある発話がアイロニーであるためには、その発話以前の何かとの関係で、それをエコーするものとして捉えることが必要になろう。それは、アイロニーの特徴を明らかにするためには、必要不可欠なものと言えよう。しかし、エコーという概念だけで全てのアイロニーを処理しようとする、当然の事として、その概念を拡大解釈する必要性が出てくるし、一切の例外もなく処理しようとするほど、その拡大の幅が大きくなっていくであろう。そうした方法がいいのか、それともより単純に処理するために、別の概念を取り入れて並列的に説明したり、エコーという概念を内包するような概念を取り入れて説明する方法がいいのか、少なくとも検討する価値はあるであろう。前掲の例にしても、例えば、突然階段を踏み外して、前後に関係なく、しかも唐突に「おお、素晴らしい。見事だ。」と言う時、その場に居合わせた人なら誰でも、階段を踏み外した行為とその発話の関係から、その発話の反対のことを伝えようとしていることは明らかで、そこに物事がうまくいったほしいという一般的な欲求を持ち出して、それをエコーしていると説明する必要が果たしてあるのであろうか。ただし、一般的な規範と欲求、特定の規範と欲求などを無意味であると言っているわけではない。例えば、アイロニーにおいて、非難による賞賛よりは、賞賛による非難の方が一般的であるが、それを説明するには大いに役立つからである（なお、丁寧さの視点からの説明も可能である）。それとアイロニーであるかどうかの判断とは、区別して考えるべきであろう。ともかく、反対という概念による定義では説明できないケースがあることはすでに明らかにしたが、エコーという概念による定義で全てを網羅的に説明しようとする、拡大解釈が必要になり、もしその拡大解釈の広がりが大きくなりすぎることを避けようとするならば、エコーという概念では説明できないアイロニーの存在も認めざるをえなくなるであろう。

次に、エコー的でないと言われる慣用句的なアイロニー (idiomatic irony) は、どうであろうか。それは、Barbeのありふれたアイロニーのことであるが、Barbeにとっては、エコーという概念に基づく説明ではないため、簡単明瞭なものとなっている。しかし、Sperber & Wilson (1997, p. 286) にとっては、全てのアイロニーをエコーという概念で説明しなければならず、従って慣用句的アイロニーもエコー的であると言わなければならない。それは、最初のエコー的状态とアイロニーとしての効力を失い、エコー的であると必ずしも気付かれるわけではないが、エコーであると分かって初めて、純粹にアイロニーとして解釈することが可能になるという説明である。言い換えれば、慣用句的アイロニーについて、起源的にはエコー的であるが、少なくとも慣用句的になった時点では、エコー的特徴を持っていないことを認めていることになり、また反対という概念による説明の方が有効であることを示すことにもなる。

更に、エコー的でないと言われる複雑なケースについても、Sperber & Wilson (1997,

pp. 288-289) は、エコーという概念による説明が可能であるとしている。彼らの言う複雑なケースには、非難による賞賛型 (praise-by-blame type) のアイロニー、それにBarbeの字義的アイロニーが含まれており、直接的にはHamamoto (1997, pp. 260-263, pp. 266-269) の主張に関連して説明している。最初に、非難による賞賛型のアイロニーから始める。一般的には、賞賛による非難型 (blame-by-praise type) のアイロニーを対象にする傾向が強く、極端な場合は、前述のBarbeのように、純粋に賞賛だけを目的にすることはできず、何らかの批判が必ず含まれるとして、非難による賞賛型のアイロニーの独自性を否定する意見もある。それに対して、Hamamotoは普通のアイロニー (賞賛による非難型) とは区別できる、もう一つのタイプのアイロニーとして非難による賞賛型のアイロニーの独自性を認めており、Sperber & Wilsonもその点を評価している。例えば、夫の次郎が旅行の費用をごまかして、自分にプレゼントを買ってくれたことを京子が知って、夫にYou are so naughty (よくないわ) と言って、感謝の気持ちを伝える例である。そのような例に対して、Sperber & Wilsonはどのように説明するのだろうか。というのは、例えば、前述の一般的な規範と欲求について言えば、普通は、賞賛するために一般的な規範あるいは欲求をエコーして、非難を伝えることになるが、ここではお金をごまかす行為が社会規範そして人々の一般的な欲求に反することは明らかで、従って非難するために一般的な規範あるいは欲求をエコーして、賞賛を伝えるとは言えなくなり、また前掲の分類の他のものにも当てはまらないからである。そこで、彼らはa justifiable public criticism (正当と認められる公的批判) とみなされるようなものをエコーしていると言う。前掲の分類の他に、更に追加されるのであろうか。複雑なケースが見つかるたびに、追加が必要なのであろうか。すでに広範囲に及んでいるエコーの出所をどこまで広げる必要があるのであろうか。ただし、非難による賞賛型のアイロニーの存在を認める点では評価できるが。

字義的アイロニーは、どうであらうか。非字義的アイロニー (とくに、一時的なアイロニーの中の賞賛による非難型のアイロニー) ような典型的な場合とは異なり、扱いにくいケースであると言える。というのは、反対という概念による定義を批判する際にも、またエコーという概念による定義を批判する際にも、その批判の根拠として引き合いに出されるほど、微妙なケースだからである。Sperber & Wilsonは、どのように説明するのだろうか。すでに述べてきたように、1981年の論文では、話し手が字義どおりの意味の代わりに、あることを伝えようとするのがアイロニーで、字義どおりの意味に加えて、あることを伝えようとするのが標準的な含意であるとしており、それに従うかぎりでは、字義的アイロニーはアイロニーではなくなってしまうし、1986年の著書では、発話がエコー的であるという認識、エコーされる意見の出所の同定、そしてエコーされる意見に対する話し手の態度が拒否か不賛成のいずれかであるという認識の三要素によってアイロニー発話が判断されるとしており、それに従うかぎりでは、同様の結果になってしまう。ところが、1997年の論文では、字義的アイロニーの存在を認め、アイロニーの複雑な

ケースの一つとして説明する。彼らによれば、非字義的アイロニーの場合は(1986, pp. 239–240)、話し手がエコーされる意見(エコーされる思考、言われること、発話、発話の字義どおりの意味など)から自分を切り離し(dissociate oneself from the opinion echoed)、その意見を持っていないことを示し、否定的な態度を表すことになるが、字義的アイロニーでは(1997, pp. 288–289)、話し手が発話の字義どおりの意味に賛成し、それから自分を切り離すことはないということになる。つまり、発話の字義どおりの意味を拒否し、その代わりにあることを伝えようとするのではなく、字義どおりの意味に賛成し、それに加えてあることを伝えようとするのであり、話し手の発話に対する態度は肯定的なものとなる。そのように考えていくと、非字義的アイロニーと字義的アイロニーは、話し手がエコーされる意見(エコーされる思考、発話の字義どおりの意味など)から自分を切り離すことで、その意見を持っていないことを示すのか、それともその意見から自分を切り離さずに、その意見を持っていることを示すのか、また話し手のエコーされる意見に対する態度が否定的なのか、それとも肯定的なのかによって区別でき、反対の関係にあると言えよう。そのような反対の関係にあるもの全てをアイロニーとして捉え、エコーという概念で説明しようとする、様々な形での拡大解釈が必要になり、例えば、話し手が直接エコーされる思考からではなく、そのエコーの中に暗に示される仮定から自分を切り離すと言うように、字義的アイロニーの場合は、話し手は直接エコーされる意見、思考などから自分を切り離さずに、しかもそのエコーの中に暗に示される仮定からは自分を切り離すことになり、彼らの説明が複雑化され、複雑なケースが探し出されるたびに、更に複雑化され、明快さを失ってしなうことになろう。なお、決して字義的アイロニーの存在を否定すべきであると言っているのではなく、その存在を認める点では、評価できるが、その説明の仕方に同意できないところがあるということである。

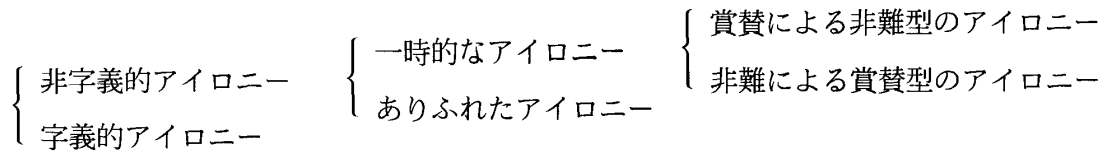
以上、Sperber & Wilsonのエコーという概念による説明の可能性について見てきたが、納得のいく説明が可能であると思われるケースもあれば、そうでないケースもあった。それらについて、Setoのように、エコー的アイロニーと非エコー的アイロニーにはっきりと区別し、エコーと反対という二概念で処理するのか、それを強く否定するSperber & Wilsonのように、エコーという概念だけで処理するのか、いずれを受け入れるかは別にして、アイロニーを説明する上で、エコーという概念がどのような役割を果たすのかを検討し、理解することは重要であると言える。

4. おわりに

本稿では、言葉によるアイロニーに限定して、前半の「伝統的なアプローチ」においては、反対という概念を中心に、アイロニーの古典的定義と伝統的定義について検討し、後半の「最近のアプローチ」においては、話し手の態度と目的、アイロニーの分類、エコーという概念による定

義について検討してきた。そこで、幾つか気が付いたことを述べて、本稿を終えることにする。

第一に、下記の分類を利用して、アイロニーの特徴を次のように言うことができよう。



典型的とされ、よく引き合いに出される例が、非字義的・一時的・賞賛による非難型のアイロニーであり、反対とエコーのどちらの概念でもかなり処理でき、非字義的・一時的・非難による賞賛型のアイロニーは、量的には少なく、単純さだけから見れば、反対という概念の方が処理しやすく、非字義的・ありふれたアイロニーは、慣用句的になればなるほど、字義どおりの意味が意識されなくなればなるほど、反対にしろ、エコーにしろ、いずれの概念であれ、処理しにくくなり、字義的アイロニーは、反対とエコーのどちらの概念でもすっきりと処理することは難しいという具合に、それぞれの特徴を説明することができよう。

第二は、反対という概念についてである。長い歴史の中で保持され、現在でも事典、辞書、概説書、テキストなどで使用されている反対という概念によるアイロニーの定義は、様々な批判を受けながらも、簡単には消滅しないで生き延びてきており、それほど根強いものであると言える。その理由の一つとして、次のようなことが考えられる。アイロニー発話の場合、話し手が実際に口に出して言うこと、そして聞き手に本当に伝えようとしていることの間には、何らかの食い違いが生じることになるが、隠喩など、他の様々な種類の発話でも、食い違いは生じるのであり、それらからアイロニーを区別するために、日常的に耳にし、分かりやすいものとして反対の関係が典型的とみなされ、また両者が反対の関係になればなるほど、アイロニーの効果は高まり、逆に類似の関係に近付けば近づくほど、アイロニーの効果は低くなると思われるからである。勿論、いつも必ず完全な正反対の関係にあるというわけではなく、かなりの幅が存在し、すでに検討したように、狭義の反対だけでなく、反対の関係を緩やかに捉え、しかも矛盾・否定までも、更に非両立、不適合なども含む広義の反対という概念が必要になってくる。しかし、反対という概念を拡大解釈するにしても、無制限に拡大することはできず、従っていわゆるアイロニーとされているケース全てを網羅的に説明することはできなくなるであろう。その意味で、更に検討する必要がある。

第三は、エコーという概念についてである。上記とは全く異なる視点からアイロニーを定義する。それは、Sperber & Wilson (1986, p. 243) が話し手の思考と発話の関係を利用する隠喩とは異なり、話し手の思考と話し手以外の人の思考の関係を利用するのがアイロニーであると言っていることから明らかであろう。つまり、反対という概念による定義では、話し手の思考と発話の関係を対象にして、それが反対の関係にあるということになるが、それとは全く異なり、

エコーという概念による定義では、話し手の思考と話し手以外の人の思考の関係を対象にして、後者をエコーし、それに対する話し手の態度を示すことになるのである。そのような話し手の思考と話し手以外の人の思考の関係の典型的なケースは、直前あるいはしばらく前の話相手の発話をエコーする場合である。しかし、それだけではアイロニーを説明することができず、上記と同様に、エコーという概念を拡大解釈する必要性が出てくる。話し手以外の人を話相手の特定の人から、ある種の人、一般の人々へと、更に社会一般、文化一般へと拡大し、発話も実際の発話から想像上の発話へと拡大し、時間も現在から過去へ、未来へと拡大し、一般的な規範と欲求も含み、更にその他のものを含み、拡大していく。もし拡大解釈を続け、「話し手以外の人の思考」の解釈を拡大しすぎると、話し手の思考と話し手以外の人の思考の関係の意味が薄れていき、結果的には話し手の思考と発話の関係になってしまい、エコーという概念の存在価値は下がることになっていくであろう。その意味で、反対という概念と同様に、更に検討する必要がある。

最後に。アイロニー発話は、聞き手がアイロニーであると気が付かなかったり、また気が付いても、その真の意味を見つけ出すことができなったりして、問題になることがしばしばあるように、危険性を持っているので、その意味から言えば、反対の関係であれ、エコーであれ、聞き手にはっきりと気付かせて、アイロニーであることを分からせることが必要になってくる。従って、いずれの概念であれ、大幅に拡大解釈しなければ説明のつかないようなケース（微妙な、あるいは複雑なケース）をアイロニーであるとすべきかどうかは問題で、その点の検討も必要である。

使用文献

- Barbe, Katharina, *Irony in Context* (John Benjamins, 1995).
- Blakemore, Diane, *Understanding Utterance* (Blackwell, 1992). 武内道子・山崎英一訳『ひとは発話をどう理解するか』(ひつじ書房, 1994) も使用。
- Dascal, Marcelo, *Pragmatics and the Philosophy of Mind I* (John Benjamins, 1983).
- Enos, Theresa (ed.), *Encyclopedia of Rhetoric and Composition* (Garland, 1996).
- Fogelin, Robert, *Figuratively Speaking* (Yale University Press, 1988).
- Gibbs, Raymond W., "Process and Products in Making Sense of Tropes" in Andrew Ortony (ed.), *Metaphor and Thought* (Cambridge University Press, 1979). なお、本稿では、second edition (1993) を使用。
- Goatly, Andrew, *The Language of Metaphors* (Routledge, 1997).
- Green, Georgia M., *Pragmatics and Natural Language Understanding* (Lawrence Erlbaum Associates, 1989). 深田淳訳『プラグマティックスとは何か』(産業図書, 1990) も使用。
- Grice, H. Paul, "Logic and Conversation" in Peter Cole and Jerry L. Morgan (eds), *Syntax and Semantics Volume 3 Speech Acts* (Academic Press, 1975).

- Grice, H. Paul, "Further Notes on Logic and Conversation" in Peter Cole (ed.), *Syntax and Semantics Volume 9 Pragmatics* (Academic Press, 1978).
- Hamamoto, Hideki, "Irony from a Cognitive Perspective" in Robyn Carston and Seiji Uchida (eds.), *Relevance Theory* (John Benjamins, 1997).
- Hymes, Dell, "A Theory of Irony and a Chinookan Pattern of Verbal Exchange" in Jef Verschueren and Marcella Bertuccelli-Papi (eds.), *The Pragmatic Perspective* (John Benjamins, 1987).
- Leech, Geoffrey N., *Principles of Pragmatics* (Longman, 1983). 池上嘉彦・河上誓作訳『語用論』(紀伊国屋書店, 1987) も使用。
- Levinson, Stephen C., *Pragmatics* (Cambridge University Press, 1983). 安井稔・奥田夏子訳『英語語用論』(研究社出版, 1990) も使用。
- Mey, Jacob L., *Pragmatics* (Blackwell, 1993). 澤田治美・高田正夫訳『ことばは世界とどうかかわるか』(ひつじ書房, 1996) も使用した。
- Searle, John R., "Metaphor" in Andrew Ortony (ed.), *Metaphor and Thought* (1979). なお, 本稿では, second edition (1993) を使用。佐々木健一編『創造のレトリック』(勁草書房, 1986) に収録されている渡辺裕訳のジョン・R・サール「隠喩」も使用。
- Seto, Ken-ichi, "On Non-echoic Irony" in Robyn Carston and Seiji Uchida (eds.), *Relevance Theory* (1997).
- Sperber, Dan and Wilson, Deirdre, "Irony and the Use-Mention Distinction" in Peter Cole (ed.), *Radical Pragmatics* (Academic Press, 1981).
- Sperber, Dan and Wilson, Deirdre, *Relevance* (Basil Blackwell, 1986). 内田聖二他訳『関連性理論』(研究社出版, 1993) も使用。
- Sperber, Dan and Wilson, Deirdre, "Irony and Relevance: A Reply to Seto, Hamamoto and Yamanashi" in Robyn Carston and Seiji Uchida (eds.), *Relevance Theory* (1997).
- Thomas, Jenny, *Meaning in Interaction* (Longman, 1995). 浅羽亮一監修『語用論入門』(研究社出版, 1998) も使用。
- Verschueren, Jef, *Understanding Pragmatics* (Arnold, 1999).
- White, Roger M., *The Structure of Metaphor* (Blackwell, 1996).
- Winner, Ellen and Gardner, Howard, "Metaphor and Irony: Two Levels of Understanding" in Andrew Ortony (ed.), *Metaphor and Thought* (1979). なお, 本稿では, second edition (1993) を使用。
- アリストテレス, 高田三郎訳『ニコマコス倫理学』(岩波文庫, (上) 1991, (下) 1973)。
佐藤信夫, 『レトリック感覚』(講談社学術文庫, 1992 a)。

アイロニー：伝統的なアプローチと最近のアプローチ(2)

佐藤信夫、『レトリック認識』（講談社学術文庫，1992b）。

村越行雄，「『言う』の意味：グライスの説明と反グライスの説明」（跡見学園女子大学英文学会紀要『跡見英文学』第10号，1997）。

村越行雄，「隠喩・換喩・提喩一言語表現の考察一」（跡見学園女子大学紀要第32号，1999）。